

第23回 ちゅうでん教育振興助成（2023年度）

小・中学校の部 報告書資料

学校名・団体名	長岡市立豊田小学校
コース	学校支援コース
活動・研究のテーマ	やってみたいの実現 ～学校だからできることの充実～

〈活動・研究の意義および活動報告〉

1 実施計画に至るまでの経緯

2020年2月。新型コロナウイルス感染症流行拡大により、全国一斉臨時休業が要請された。およそ3ヶ月、子どもが学校に登校できない日々が続いた。学校に残る教師は、自分たちの役割や学校の存在意義を問い直さざる得なくなった。近年、オンラインシステムの向上やAIの発達が進み、教師の役割はなくなるのではないかと、教室は必要なくなるのではないかとといった話題が世間でも聞かれるようになった。こんな情勢である今だからこそ、子どもにとって学校とはどのような場所であることがよいのか、教師はどのような教育活動を構想、展開するべきなのかを考え直さなければならない。

私は、学校だからできることを充実させていくことが子どものやってみたいという思いの実現につながり、それが学校の存在意義になるのではないかと考える。子どものやりたいという思いや願いを基にしながら、学校の在り方をつくり変えていく。そんな実践を試みたいと考え、本活動を構想した。

本校で今年度から中型動物であるヤギの飼育活動を再開することとした。中型動物を飼うということは簡単なことではない。背丈が大きいからこそ思い通りにいかないこともあるし、言葉が通じないからこそ何を求めているのか悩むこともある。そうした状況が、挑戦意欲を掻き立てることにつながるのである。また、ヤギは人に懐きやすい動物であり、関われば関わるほど、擦り寄ってくる。初めはヤギに戸惑っていた子どもも、ヤギとの関わりをつくり、つくり変えていく中で、充実感や満足感を得ることができよう。その経験が「やぎさんのためにもっとこうしてみようかな」「こんなことをするとやぎさんが喜ぶんじゃないかな」という新たな思いを湧き上がらせ、生き生きと活動していくことにつながるのである。

こうした中型動物を日常的に飼育することは、家庭や塾では実現が難しいし、仲間がいるからこそ可能になる活動である。つまり、学校だからできることの一つになると考える。本校は、長岡市の街中にあり、なかなか動物と触れ合う機会が少ない地域である。だからこそ、ヤギを飼育する活動を実践することによって、子どもは感性を豊かにし、学校で過ごすことの楽しさや仲間と繋がることの良さを味わっていく。

2 研究の時期 令和5年6月～令和6年2月

3 研究の目的

子どもが中型動物と関わることを通して、生き物に働きかけることの充実感や仲間と協力してやり遂げることの達成感を味わいながら、学校で生活する楽しみをつくる。

4 活動内容

(1)対象者 小学校1年生 144人

(2)教科 生活科

(3)主な活動の実際

①ヤギとの出会い

学校にヤギを迎えることに決めた子どもは、ヤギを迎える準備をしたいと願い、看板を作成したり小屋をきれいにしたりした。

6月26日にヤギを迎えた。子どもは学校生活を共にするヤギを見たり触れたりしながら、期待感を膨らませていた。このことが学校で生活する楽しみのきっかけとなった。



②ヤギとの関わり

ヤギと子どもの学校生活が始まった。子どもは「ヤギさんにご飯を食べてもらいたい。」「毛をなでなでしたい。」と話し、ヤギと関わった。作文シートに「ヤギさんがはっぱをたべてくれたよ。うれしかったよ」「ヤギさんの足めっちゃはやかった。びっくりした」と書く様子から、ヤギと共に生活する充実感が表れていた。

ヤギが柵に向かって飛び跳ねている様子を捉えた子どもが「ヤギさんは高いところが好きみたいだから、ヤギさんのアスレチックをつくったらいいと思う。」と呟いた。それを聞いていた子どもが「いいね。ヤギさんアスレチック作ろうよ。」と話題を広げ、ヤギと共に活動する遊び場「ヤギさんランド」作りが始まった。

子どもは教師が用意しておいた木材やビールケースを使ってアスレチックを作り始めた。「ヤギさんがケガしないようにくぎ出ちゃだめだよ。」「ヤギさんが乗れるようにビールケースを横に並べて広くしよ。」とヤギのことを一番に考えながら遊び場作りに励んだ。みんなで作った遊び場でヤギが遊んでくれた日の作文シートには、「きょうあおとそら（ヤギの名前）がすべりだい（遊び場の一部）の上ののってくれました。やったーっておもいました。なんかいいものってくれました。わたしものりました」と書かれていた。ヤギのための遊び場が完成したことの満足感やヤギと新たな関わり方ができることへの期待感など、様々な思いが表れていた。子どもはこうした活動を繰り返しながら、ヤギとの関わりをつくり、広げ、深めていったのである。

③ヤギとの別れ

雪が降る前にヤギを貸主に返すことになり、子どもは「ヤギさんのお別れ会を開いてあげたい」「ぎりぎりまでヤギさんとあそびたい」と願った。子どもはヤギが帰る前日まで餌をあげたり、ヤギさんランドで遊んだりした。その日の作文シートに「きょうはたくさんあそんだ。たのしかった。ヤギさんかえるのさみしいな」と書いてあったことから、別れについて葛藤していることが捉えられた。

ヤギさんのお別れ会当日、小屋を掃除したりえさを上げたりしている子どもがいた。「最後だからいつものことがしたい」と話していた。ヤギがいる生活が日常になっていたことが伝わった。

ヤギがトラックに乗ると子どもはそのトラックを囲むようにして見送った。トラックが見えなくなる最後まで追いかけたり手を振ったりしていた。トラックが見えなくなると思わず涙し、「会いたいよー」と叫ぶ子どもがいた。ヤギとの関わりが深くつくられていたから表れた様相だと捉えられた。

④別れの後に

ヤギと別れた数日後、自分が書いた作文シートを読み返す子どもがいた。その姿を捉え、学級で作文を読み返し、「あおとそらが教えてくれたことは何か」と問うた。「ともだちはいつでもともだちってことをおしえてもらったよ。みんなもどうぶつともだちだし、はなれてもそばにいてもともだち。」と最後の作文シートに書いた。

子どもはヤギと関わる活動を通して、友だちとの関わりを広げたり学校の楽しさを捉え直したりしながら、学校で生活する意義を感じ取ったのである。

